

巻頭言



ジャンプの10年ステップの10年

所長 岡田 恒男
Tsuneo OKADA

新しい年を迎えるに当たり一言ご挨拶申し上げます。

昨年は、生産技術研究所の創立40周年に当たる年でした。言うまでもなく、今年は50周年に向けて新たな10年のスタートを切る節目の年に当たります。20世紀最後の10年への入口の年でもあります。私は、この10年を、私達の研究所の20世紀最後のジャンプの10年として、また、21世紀への新たなステップの10年として位置づけたいと考えます。

昨今の科学技術の目ざましい進歩は、来るべき10年でどのような革新が為されるかを容易に外挿できる状況にはありません。しかしながら、情報、通信、輸送手段の進展により、地球が、そして宇宙が見かけ上ますます狭くなっていくことは確かでしょう。近代科学の目的の一つが、時間軸を縮めることにありと定義するならば、これは近代科学の成果であり、この傾向はますます続くものと考えられます。新しい超伝導物質の発見、常温核融合実験のニュースがその日のうちに世界を駆け巡り、翌日には追試が為されるようになりました。近代都市システムの脆さを示したサンフランシスコ地震の被害の状況が、世界中に実況テレビ中継されたことも記憶に新しいところです。私達の研究所も、この40年間、このような技術革新の一翼を担ってきたとの自負を持っています。

しかしながら、このような先端技術の進歩が、人間社会にさまざまな歪をもたらしていると指摘されていることも事実です。時間軸の急激な短縮に人間の社会構造が取り残されてきたからだと考えられます。昨年の11月に、本所で行われた「新しい工学の基礎」に関する学術講演会のパネル討論会において片山恒雄教授が指摘した、基盤工学の充実はこの歪解消への一つの解答だと言えましょう。先端技術を追い求めることは基より必要なことです。先端技術を開拓しつつ、先端技術と人間社会の融合を目指したあたらしい学問分野をも同時に開拓する総合的な工学の研究こそがこれからの10年に求められているものと考えられます。この点への工学からのアプローチこそが私達の研究所のような総合工学研究所の目指すべき道であると考えられます。

創立以来、特定の目的に限定せず、先端技術から基盤技術まで幅広い工学の領域をカバーし、かつ、常に新しい領域の開拓を目指してきた私達の研究所にとって、今、正に活躍の時がきたとも言えるのではないのでしょうか。既存の学問分野に拘ることなく、むしろ、研究者一人一人が新しい学問体系を創造することを尊しとし、時に応じて複数の研究者によるグループを結成することを重んじる創立以来の伝統が、人事に、予算配分に、研究室の構成にと具現されている研究所だからです。

さりとて、私達をとりまく環境にはなかなか厳しいものがあります。一つは、単一の目的ではなく複数の総合目的を持つ大学付置研究所の存在意義の確立であり、他は、研究施設・設備の充実であります。前者には、研究成果をもって答えるしかないでしょう。後者は、私達の研究所だけの問題ではなく、大学全体の問題でもあるのですが、粘り強く世の理解を得る努力を続けることが環境整備につながる道だと考えます。

年の初めに当たり、私達は40年の歴史を誇ると同時に、過去の蓄積に奢ることなく新しい10年に向けて力強い一歩を踏み出すことを誓いたいと考えます。